播種床～鉢上げ前まで

播種床培土選び

＊サラサラと流動性のある『粒状培土』を選択しましょう。移植時の根切れが少なく作物にストレスを与えません。
＊粒状培土は通気性、透水性に優れ発根も健全です。

播種箱の準備

＊一度でも使用した育苗箱は病気の発生源となる可能性があるので必ずきれいに洗って、市販の薬剤（ケミクロンGなど）で消毒をします。消毒は使用方法をよく読み正しく使ってください。

置場の準備

・土から病気が感染する
・水はけが悪い
・土の跳ね上がり（灌水時）

・病気の侵入経路がない
・水はけが良い
・土の跳ね上がりがない（灌水時）

注意

★下に敷くシートは、破れたもの、古いもの、土がのっているものは使用しないでください。

病気発生の原因！

培土充填

＊播種箱の8割程度培土を入れ、板などで表面をならします。

灌　水

＊凹凸ができないように、やさしく灌水します。
＊全体に十分水分が行き渡るように灌水します。

播　種

＊土壌が混入しないように播種します。
＊根が絡まないように種同士を数センチ離します。

覆　土

＊床土と同じ培土を使用します。覆土を変える場合は軽くて通気性の良い資材を選びます。（バーミキュライトなど）
＊暗発芽種子（キュウリ、カボチャなど）では覆土が浅いと発芽障害を起こしますので覆土の厚さに注意します。

発芽までの管理

＊発芽を揃えるために・・・
● 暑い時期は、パオパオや濡れた新聞紙などで表面を乾かさないようにし、発芽後の徒長を抑えるために被覆資材をはがします。
● 寒い時期は、保温目的でビニールやトンネルなどで覆います。
● 被覆資材からの病原菌侵入、過度の加湿、温度管理に注意。

育苗管理

＊夕方に培土の表面が乾く程度に朝の灌水を行います。夕方に水分過剰だと徒長の原因になります。特に梅雨時期、雨天、温度の低い日などでの水分過剰にも注意が必要です。
＊病気の侵入を防ぐために、灌水時や屋根からの水滴による土の跳ね上がりも注意が必要です。
＊野外育苗の場合は必ず雨よけ、害虫対策をします。
＊子葉が展開し、本葉が米粒大になったころが鉢上げ適期です。鉢上げが遅すぎると、根を切ったりして作物にストレスを与えます。

鉢上げ～鉢育苗

培土選び

＊作物・育苗時期を踏まえて、培土の性状や成分含有量の適正なものを選択します。
＊他の資材や自家製培土などとの混用は避けてください。

●鉢上げ培土の育苗日数と窒素（N）量

育苗日数				
～10日	～20日	～30日	～60日	～90日
100mg	100mg	200mg	300mg	300mg

現物Lあたりの窒素（N）含有量

＊初めから窒素量が多いと花芽分化に異常を起こしたり、根鉢形成が貧弱になります。育苗期間が長い場合は適期に追肥を行ってください。
＊キュウリなどの『ウリ科』には窒素が200mg/L以下が良いでしょう。窒素分が多いと大苗になって倒れこみが起きます。

ポットと置場の準備

＊一度使ったポットは播種箱と同様に消毒をしてください。

・土から病気が感染する
・根が土壌に達してしまう

・病気の侵入経路がない
・根が土壌に達しない

培土充填

＊鉢の8割ぐらいまで培土を充填してください。
＊過度に詰め込むと過湿や根の呼吸阻害の原因となります。
＊充填後に培土が乾き過ぎないようにしてください。（撥水）

灌　水

＊全体に水分が均一に行き渡るのを待って鉢上げします。（鉢底の穴から培土に触れて湿っている程度が適量）
＊底から水が流れるほどの灌水は肥料成分も流れ出ます。
＊病気が心配なときは、登録がある薬剤で消毒してください。

鉢上げ

＊スプーンなどで植え穴を掘り、根を傷つけないように注意しながら植えます。
＊深植えは避けるようにしてください。

育苗管理

＊徒長苗や病気の感染に注意しながら灌水は播種床と同様に行ないましょう。
＊花芽分化には温度が重要なので、温度管理を確実に行いましょう。昼過ぎまで加温して徐々に温度を下げましょう。
＊野外では特に温度管理に気をつけます。

追　肥

＊育苗期間が長い場合や太陽光が強い場合は、早めに肥料不足となる可能性がありますので注意して観察します。
＊育苗期間が長い場合は、肥料が不足する前に化学肥料や液肥で窒素（N）として100mg～150mg/鉢程度追肥します。（粒状肥料は鉢隅に指で押し込み、少し埋めるようにします。）